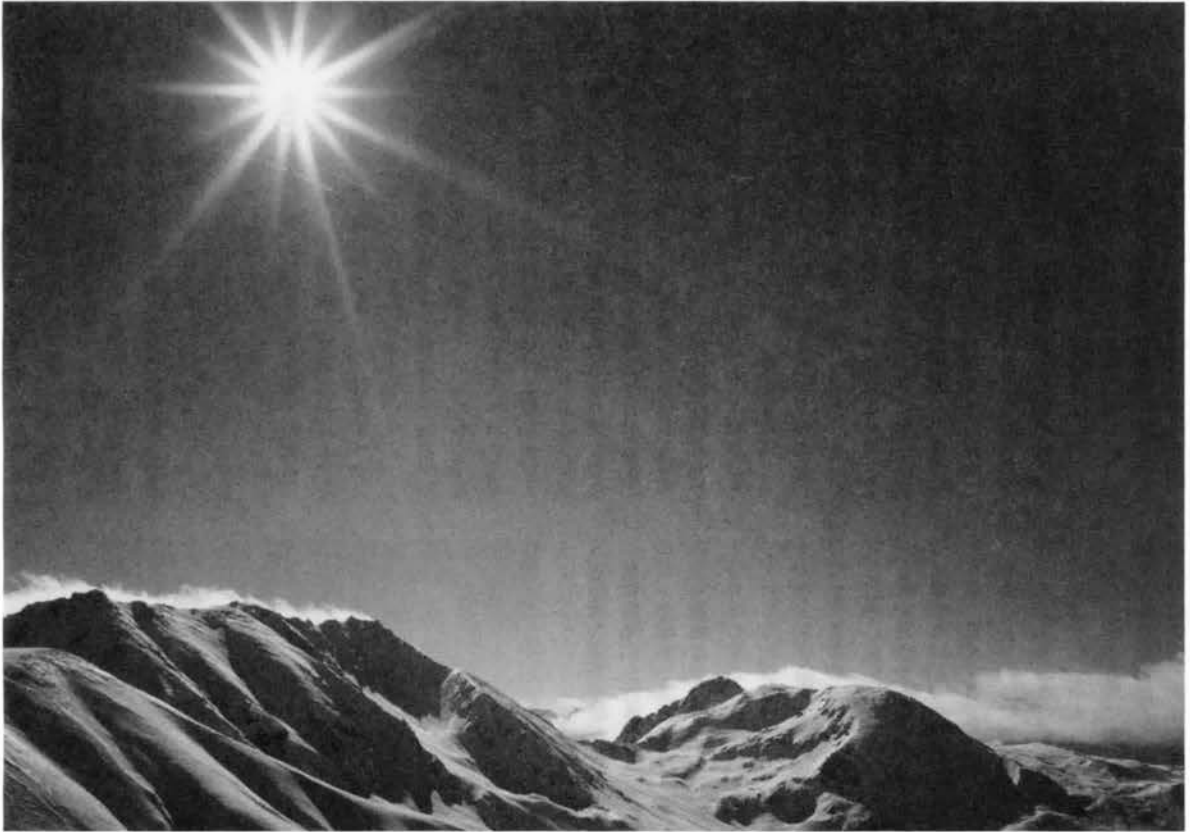


山と博物館

第45巻 第1号 2000年1月25日

市立大町山岳博物館



「初冬の立山」北アルプス別山より

撮影 大石高志

新しい年

有川美保子

コンピュータの誤作動が心配され、石油ストーブに火鉢、飲料水まで用意しなければ、と騒がれた二〇〇〇年問題。私たちの生活に大きな影響もなくいつもと変わらぬ穏やかな年明けになりました。

私は、元旦から勤務のため安曇野を一路南に車を走らせていました。カーラジオからはじめに耳に入ってきたのは、水をテーマにした全国生中継番組でした。九州からは、「神社の湧水を飲む会」の元気なおじいさん？おじいさんの声でした。会員の方々の多くは毎日一升の湧水を飲み体内の解毒作用をはかり、腹の底から大きな声で笑い健康な毎日を過しているという。埼玉県からは、新興住宅地の一面に水田があり脇の小川にメダカが棲息していることを発見した新興住宅地に移り住む主婦が集まり、メダカを守る活動をされている方の声でした。地元の方と懇談を重ねる中でメダカの住める環境の大切さを初めて理解されたときのことを弾ませて語っていました。折しも車は、穂高町の水郷、等々力大橋の上を走っていました。十数年前初めて穂高川の堤防を散策し早春賦の歌碑の前に佇み、山脈が夕日で茜色に染まり川面に映った情景に感激し以来、わさび田を作る透明な水が川底いっぱいには繁った水草と共にゆったりと流れる様に触れることを楽しみに豊科、松本方面に出掛けるときは、回り道をして澄んだ川の流れを楽しみに、いやしの時にしていました。

昨年十二月松本市でピオトープフォーラムが開催されました。「身近な自然をもっと増やそう」というテーマで講演やピオトープ展が催され新鮮な気持ちにさせられました。

二〇〇〇年代、私たち人間が自然の一員として共に生きる時代にと新しいを新たにしたい元旦でした。澄んだ空気・澄んだ水を求めて…。

(大町山岳博物館友の会副会長)

山仕事の古今(前編)

狩野清高

平成十一年八月二七日から二九日にかけて、大町市

教育委員会生涯学習課文化財係によって同市鹿島集落の民俗調査が行われた。調査は国学院大学・倉石忠彦教授(同市文化財審議委員)と跡見学園女子大学・倉石あつ子助教と学生らによる聞き取りを中心に進められた。

その調査に一日参加し、実際に鹿島集落の方からお話を聞く機会を得た。その中でも山仕事のお話は大変興味深いものであった。

そこで同年一月三〇日、山との関わりについてあらためてお話をうかがうために鹿島集落へ足を運び、昔をよく知る狩野清高さん(大正十二年三月一日生)を訪ねた。鹿島楡ヶ岳の麓に拓ける鹿島集落では、里山も含めた周囲の山々どのように付き合ってきたのか。これはそこでお話いただいた内容を編集したものである。

(編集部)

1. 落人伝説の真実

ここ鹿島部落は、その昔鹿島楡ヶ岳のカクネ里に平家落人の住み着いたのがはじまりだといわれています。本当の昔つては、部落の戸数は四戸で、それがだんだんと里へ下ってきて今ある一戸になったといわれているが、まあ確かなことは分からない。

この部落は大きな火事に二回遭ってましてね、大正七年と一二年。この部落で二回とも全く火事に遭っていないのは二軒だけで、この家々は昔つてから火事に遭っていない。火事に遭う前の家々には家系図のようなものもあつたらしいんですがね。なんしろ昔つてからの部落だつてことだね。源及(鹿島集落に隣接

する地籍)よりかえつてうちの部落の方が古いんじゃないですかね。

2. 「川流し」から「炭焼き」へ

この部落は昔、薪にする木を切つて鹿島川へ流して大町へ持つて行って売りさばくという仕事をだいたい昭和七、八年頃までやつていました。

だけでも、爺ヶ岳スキー場近くの矢沢つていう沢に大きな堰堤ができてからはもう川流しという事は許可にならなくて、それで炭焼きに切り替えたわけですね。まあ私の覚えでは昭和八年か九年頃ですか。それまでは薪を切つてたけども、それからはもう炭に切り替えたね。昭和二年に支那事変(日中戦争)が始まつたでしょう。そのころにはもう炭を焼いていましたからね。それまでも国有林から薪にする木を払い下けてもらつては生計を立てていたんだけど、今度もまた同じく国有林から木を払い下げてもらつて炭を焼いていたわけです。

部落の人たちが薪を切つていたころは、私はまだ子どもでいたからね。小学二年生か何かだつたでしょう。親父や兄貴がその方の仕事にたずさわつていたので、川へ木を流していくときにそれを見に行つたりしてたわけですよ。部落を流れる鹿島川に山から切り出した木を流して大町まで運ぶ。すると大町の王子のお宮(若一王子神社)の裏あたりに「土場(どば)」つてところがあつて、そこで木を積んで売りさばいたんです。



写真1. 話者・狩野清高さん
鹿島集落で生まれ育つた狩野清高さん(大正12年3月1日生)はかつて炭焼にたずさわり、この辺りの山仕事を詳しく知っておひとりである。当時、山仕事に使用した道具を身につけ撮影に応じてくださった。

3. 戦後の燃料不足、そして炭焼き最盛期

私は兵隊にも行きましたからね。それで私の行つた昭和一九年は戦争も最終段階で、二〇年の終戦は台湾で迎えたんだけど、そのときはもう家へなんか帰つてこられないと思つていました。それでもおかげさまに帰つていいこと、八月一五日に終戦になつてから翌年の二月の末に引き上げてきたんです。

それで戦争から帰ってきたら食糧不足で食べる米がない、つてなわけですね。まあひどい目に遭つたですよ。

そのころは戦争に負けたばかりで燃料不足つてことでもあつて、炭を増産してもらわなきゃ困るといふことになりましたね。だいたい昭和二七、八年頃まで、これはもう本当に炭焼きが最盛期だつたですよ。私も含めて周りの家々はすべて炭焼きにたずさわつていまし

た。

私の家のまへど(前方)の山は全部国有林です。鹿島部落の共有地つていうのは鹿島川の西側。田んぼを境に、そこから南側はよその人の土地で、そこから北側が全部鹿島部落の共有の山で、川から東側は国有林。昔は鹿島の共有地つてものは「二百何町歩」つていわれたけども、整備をしたら三六〇町歩になつちやつたからね。そういうことでこれだけの面積が今あるわけですよ。

それだけれども、部落の人は共有の山では全然炭焼きをしないんです。それつてのは国有林がある程度自由に安く払い下げしてもらつていたからね。この地元の人には毎年毎年時期が来れば炭焼用の木材を払い下げしてもらえたから、一軒で炭焼きの仕事に携われる人は何人でもそこに携わつてやつたつてわけ。だから自分たちの山はそのままにしておいた



写真2. 鹿島集落
鹿島集落は鹿島槍ヶ岳の麓に位置し、周囲をいわゆる里山などの山々に囲まれている。

つてわけです。むしろ大町にいた山師なんかの方が、鹿島部落の共有林でうんと(すく)人を使って炭焼きを大々的にやっていましたよ。炭を焼いただけでなくて、いいものは材木で出したりという商売をやったですわ。

4. 山をくじ引きで決める

仕事をする山の決め方っていうのはね、昔からこれは村内で毎年くじを引きました。そうでないと山の奥とそれからまえどとあるでしょ。行って帰ってくるのと、同じ山でもだいが仕事にかかる時間と労力に差が出てしまうから、くじを引いたこともあるということ。山のまえどを取った人が奥の人に多少なりとも金を出すと、今年麓にいた人はその次の年ときは奥に行くとかね。まあ、あんまり金つてことは聞かなかったがね。く

じつ引きでもつて、部落でいざこざが起きないように話をしてやっていったというわけですね。

5. 「炭焼き」という仕事

私が炭焼きを覚えてつからは、この部落の東山での仕事が多かったです。炭に焼いたのは白炭でね。昔は一回に三〇kgの俵入れをだいたい大きな釜の人は一〇俵。それくらいは炭は、三日か四日っていうとできる。それを四日おきに休まず焼く。うちの部落で焼いたのはほとんど「シロ」っていうてね、白炭だけですね。

炭にした木っていうのはナラとかクリとか、それからカエデ、シラカバとかあらゆる雑木を全部使いました。ただ、なかにはマツとかヒノキとか針葉樹が天然木であったけども、それはやらない。針葉樹は全然炭に焼かなくて広葉樹だけでね。

炭焼きをするには、川の沢々や山へ入って、そこで木を集められる範囲をちゃんと決めて、そこへ釜をひとつ作る。それからまた次の山で木の集まりいいところへ釜を作るってようにね。それでひとつの釜をついた(つくった)そこへね、全部木が集められる。それを見てね、次の人はまた山の両側から木を集めて釜を作ってくる。

釜の口つてのは、人間が横になって入れるだけの大きさで、上はだいたい四尺くらいの高さに切つてあってね。はじめは先が二股に分かれた「タテマタ」(先端が金属で、柄が木製の一・五m位の棒)で奥の方から木を立て掛ける。そして半分からまえどの口元へ来るとなかなか時間がかかるから、若い人なんかとんとんと釜の中へ丸太をかついで入っ

て立て掛けた。そうするとうんと時間が早いからね。それで立ててしまつたら、釜の口をだいたい三分の一あけて、あとは塗りふさげてね。そして空いた口のところから下へ火をつけるわけ。これがついちまうとちよと風を入れるだけにして、ピシヤツと口をふさげてしまう。これがうんと釜が焼けてるときだつたら二時間くらいで頭の方まで火が回る。それから下へ燃え下がっていつて焼けていく。それで一晩中かけて焼く。その間「セイレン」をくれるつていつて、何ていうか炭に風を入れて炭を硬くする作業を時間おいてしなくちゃいけないから、家に帰ってきたんじやそれができないから泊まつてね。夜二回も三回も起きて、そして風を時間になつたらくれてね。そして早く真つ赤にして出すつていう作業をやつたです。

夜見ていると下はまだ黒くてモンモンと燃えているわけですよ。それを早く燃やしちまうために口の少しあいたところから自然と風を入れて、そして釜の後ろのところに「煙出(けむだし)」があるでしょ、それを順に開けていくの。火が上へ回つて完全についたら、煙出も閉める。一度に閉めたら消えちゃうから順に三回くらいで閉めて、それで三日なら三日間のうちに燃えるように調整するわけ。そうすると次の日の朝四時ころには焼きあがつてしまつてですよ。それから二時間ほど冷めます。熱くて釜に入れられないからね。こんだ冷めたところでもつて、炭を「マキダシ」つていうカナン棒(三・五m位の金棒)でかき出したんですよ。

それからだいたい二時間くらいで次の丸太を立て込んでしまつたらまたすぐ火をつける。そしてようやく小屋へ入つて朝飯を食

べたです。朝飯がすむと、こんだ「ゴベ」つていう炭の粉と土を混ぜ合わせたものを炭の上へかけて火を消したですよ。真つ赤になつて炭が出てくるでしょ、その出した炭のあいさ(間)へみんな入るから、絶対燃え上がらないね。それが水だつたら炭を傷めちゃうから水は絶対に使わない。

さつきつた火が焚けるまでの間に、ゴベをかけた炭を俵に詰めるわけ。だから次から次へと忙しいですよ。それでそうすねえ、一〇俵くらいの炭を全部始末してしまうのが夕方四時ころでしたね。

その炭をすぐ持つて来るつてわけにはいかないから、釜のじき(すぐ)そばへ小屋を建てます。そうすねえ、五〇kgくらいは積み込みましたか。ちよつとした山の木やトタンを利用したりして、雨のあたらないようにそこへ積み込んでいく。それで小屋が一杯になると山から運び出す。そして鹿島川を架線を使って横断して持つてきました。今では索道つていうけども、昔は架線つていつた。八番線くらいな太さの鉄製の針金をこの川幅三〇〇mくらいまでずうつと張つて、木でこした(作つた)車をそれへぶる下げて一俵ずつ運び出したですよ。それで架線に近い人はそこまですぐに運べたけども、沢の奥へ入つた人は土樋(ドソリ、ドソーリ)つてもものを使わなきゃ持つてこれない。土樋は木でできたソリで土の上じゃあ重たくて曳いて来られないから、沢にずうつと間隔をおいて丸太を敷いて、その上を曳いてきたですよ。そういう仕事をやつたわけですよ。

(次号へ続く)

「カモシカの角」あれこれ

千葉 彬 司

鍋木外雄博士は「カモシカの保護に関する卑見」の中で、「カモシカはその肉美味にして珍重せられ、毛皮は敷物に、皮は古来靴褥或は鞍褥に、又革として靴の材料に供せられ、角はカツオ鉤に、又犀角の如く漢方薬に利用せられ」と述べている。(1)

カモシカは古い時代から狩猟の対象となっており、肉や毛皮などはさまざまな形で利用されてきた。ここでは角がどのようなことを物語っており、どのように利用されてきたかを見てみたい。

カモシカの角には、角の基部から先にかけてリング状に凹凸がある。これを「角輪」といっている。

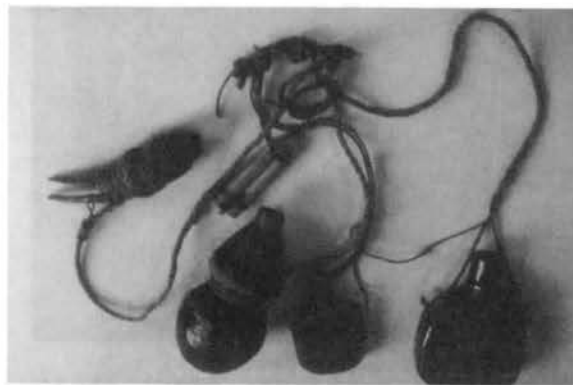


写真1 弾丸入れ 左端「カラス口」(山岳博物館 所蔵)

この研究が進み年齢査定が可能となった。角輪と角輪にはさまれた凹部は、主に春から夏にかけて蓄積される毎年の成長量である。三歳までの若い時期には、初期成長のため大きい年輪と共に少なくなり、次第に一定の量に安定する。オスの角は全てこのパターンを示している。

しかし、メスの方は三歳以上でも目立って少ない成長量を示すものもあった。この原因については北海道大学の杉村誠・喜多功両先生と、農林水産省森林総合研究所の三浦慎悟先生の共同研究により解明された。

メスの角の成長量の増減は繁殖状況によって左右され、また、餌条件の良し悪し、病気など繁殖以外の要因も関係していることがわかった。(2)

カモシカの角は単なる防衛の武器としての他に、そのカモシカの生きてきた過去を示す履歴書でもあったのである。

このカモシカの角を人々はこのような形で活用してきたのであろうか。

平安朝の昔、カモシカの角が税金代わりに納められ記録がある。記録には土佐、安芸、伊豆、美濃、出羽など十五カ国から角七十二頭分が貢進したとある。(3)

醍醐天皇の命により編纂した「延喜式」(九二七)には薬物として「羚羊角」があげられている。(4)

この角は削って煎じ、脚気や解熱、腹痛、はしかなどの病気に用いられていたようである。(1)

また、薬用以外ではカツオ釣りやイワシ釣りに擬似餌として利用され、需要が供給に追いつかなかったといわれ高値で取り引きされたという。(1)

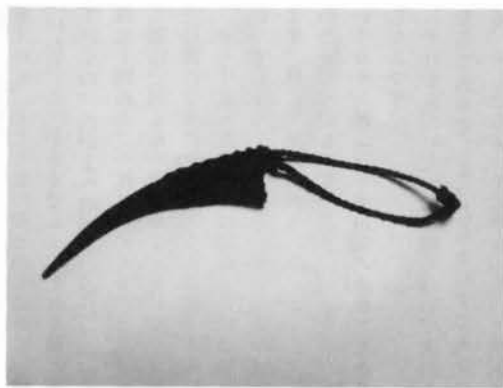


写真2 カモシカ角の根付(「志摩」島謙司氏 提供)

さらに、角を加工して弾丸の差し入れ口として活用した。角の中をくりぬき先を削り、基部に弾丸入れの小袋を取り付けたもので、地方によってはこれを「カラス口」と呼んでいた。差し入れ口の加工した形が、黒くカラスが嘴を半開きにした形に似ているところからそのような呼び名になったようである。(1)(写真1)

角の中をくりぬいてパイプにも加工されていたようで、年寄りのカモシカの角はもろいので、若いカモシカの角で作るのが良いとも言われていた。(1)

また、幼獣の角は「根付」にされ、「緒じめ」や飾り物などの細工ものに利用した(秋田県松木内村)。(5)

平成十年十一月、金沢市のひがしの廓の当時のお茶屋造りをそのまま保存している「志摩」(金沢市指定文化財)を見学する機会があった。

そこでも思いもかけぬものを見つけたのである。それは当時の上流町人や芸妓が用いた銀煙管や煙草入れ、鮮やかに彩色された櫛、鼈甲の笄などの粋な細工が施された展示物に

混じって、ほとんど加工らしいものが施されていない一本のカモシカの角が展示されていたのである(写真2)。

いったいこのカモシカの角は何の目的で使われていたのだろうか。「志摩」の島謙司氏によると、煙草入れの「根付」として使用されていたものだそう、多分「気の張らない時」に使用されていたものであろうとのことであった。カモシカは白山山麓に多く生息しているところから、そのものが捕獲され利用されたものであろう。

(大町山岳博物館 顧問)

(注) 笄 女性の髪飾りのひとつで、髻などに差す物
(注) 根付 煙草入れ、印籠、巾着などを帯にはさんで腰に下げる時、落ちないようにそれらの紐の端につける細工物
(注) 羚羊角 カモシカの角

参考文献

- (1) 千葉彬司(1981) 「カモシカ物語」(16・179・180) 中央公論社
- (2) 大町山岳博物館編(1991) 「カモシカ」(78・79) 信濃毎日新聞社
- (3) 毎日新聞(1975) 特集「知られざるカモシカ」
- (3) 宮尾謙雄(1985) 「ニホンカモシカの分布と生活史」(2) 動物と自然(15-11)
- (5) 司東真雄編(1976) 「マタギ狩具」(111・112) 岩手県北上市北上史談会

山と博物館 第45巻第1号
 発行 二〇〇〇年一月二十五日発行
 〒002 長野県大町市大字大町八〇五六一
 306 市立大町山岳博物館
 TEL 026-1331011
 FAX 026-1331133
 印刷 奥村印刷
 定価 年額一、五〇〇円(送料共) (切手不要)
 郵便振替口座番号 〇〇五四〇一七 三三三九三